

ストーリー・マンガの作品を利用した、異文化間理解教育の教材とプログラムの開発

因, 京子
九州大学留学生センター准教授

松村, 瑞子
九州大学言語文化研究院教授

<https://hdl.handle.net/2324/16838>

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2008-03
バージョン：
権利関係：



談話ストラテジーとしての ジェンダー標示形式

因 京子

1. はじめに

本稿は、最近の小説、マンガ、エッセイなどに現れたジェンダー標示形式の使用例の観察を通して、ジェンダー標示形式が談話においてストラテジーとして使用され種々の効果をあげていることを示し、その表現手段としての新たな可能性について考察するものである。

言語に性差が現れるのは日本語だけの現象ではなく、例えば英語においても女性の話す言葉に特定の語彙の多用、強い断定表現の回避、付加疑問文の多用など男性の話す言葉とは異なる様々な特徴があるということが Robin Lakoff(1975)によって夙に指摘されている。しかし日本語の場合は、話者のジェンダーによって言語使用に特定の傾向が見られるというだけでなく、ジェンダーを示す形式的な特徴があり、それらは単一の使用でも明確な指標となり得る。「おれ」「あったわ」「いくぞ」など、ジェンダー標示形式が含まれている発話は一言でも話者の性別がわかり、このことは日本語の大きな特徴であると言われてきた。

ジェンダーを明示する形式の使用は今日では非常に減少していると指摘されており(尾崎 1997、中島 1997)、その一方で、ドラマなどでは非現実的に多く用いられていると報告されている(水本 2004)。単純に計量的に見るとフィクションは伝統的なステロタイプを強調し現実とかけ離れているということになるのかもしれないが、現代ドラマの登場人物の「あったわ」「いくぞ」などのせりふに、時代劇の「これでござる」「あしたじゃ」などに感

じるような非現実性は感じない。ここで思い出すべきは、ドラマや小説などのフィクションは、限られた時間や紙幅の制限の中で、現実にかかるかもしれない無数の出来事の中から高度の緊張や劇的展開を含む場面を集めて構成されるということである。そうした場面では、技巧的・戦略的な言語使用が多く出現するであろう。フィクションの中でジェンダー標示形式の使用が多いとすれば、ステロタイプが誇張されている可能性ももちろんあるが、談話における技巧や談話のストラテジーとして機能している可能性もあるのではないだろうか。事実、最近の小説やマンガには、ある人物がジェンダー標示形式を自分のアイデンティティの表現として一貫して使い続けるのではなく、特定の文脈の中で意図的に用いたり用いなかったりしている例がしばしば見られ(因 2003、2004a、2005b)、ジェンダー標示形式がコードスイッチングや逸脱を示して「推論の連鎖」を引き起こしていることが観察される¹。ジェンダー標示形式は、単純に話者のジェンダーを示すために使われているとは限らず、話者のジェンダーを示すことの意味も、一つではない。

推論の連鎖が引き起こされるには何らかの逸脱・有標性が認識されなければならない。伝統的には、話者の性と一致するジェンダー標示形式の使用は無標、一致しない形式の使用は有標の選択と見なされてきたが、現代では、話者のジェンダーと一致していても年代などその他の特徴が話者のそれと大きくずれている形式²は有標となる。更に、通常中性的言語を使用している話者にあっても、話者の性と一致している一般的なジェンダー形式の使用ですら有標であり得る。男女の言語の形式的な差が少なくなれば、その差異を明示する形式が特定の含意を示唆する可能性は広がる。ジェンダー標示形式の使用が減少しているのであれば、その談話における機能を新たな視点から観察・分析してみる必要が生じていると考えられる。本稿は、小説、マンガ、エッセイなどを対象として、ジェンダー標示形式が意図的に選択されていると考えられる例について、談話の中でどのように機能し得るか、その可能性の広がりとその間に働いているメカニズムを観察するものである。

以下、2節では話者のジェンダーと一致したジェンダー標示形式の使用

例、3節では一致しない使用例を観察し、意図的に文体形式の逸脱的使用を行うストラテジーを「他人格モード」と呼ぶことを提案する。尚、本稿では紙幅の節約のため「男性専用／女性専用とされてきたジェンダー標示形式」をそれぞれ「男性／女性形式」、ジェンダーについて無標である形式を「中性形式」、伝統的には男性または女性形式であったが今では中性と考えられる形式を「男性的／女性的中性形式」と呼ぶ。

2. 話者の性と一致したジェンダー標示形式使用

2.1 連帯意識を強化する男性形式

(1)は、同じ大学に学ぶ若い男性同士の会話である。

(1) (夜中の電話)

青治 : はあい、誰だよ、こんな時間に。

スギモト : よう、起きてた？

青治 : なんだよ、スギモトかよ、明日じゃだめなのか。

スギモト : こっちも電話で起こされたんだ。わかるだろう？

青治 : 花か。

スギモト : そう。今度こそ別れたって言ってたけど、本当なのか？

(石田衣良「泣かない」『スローグッドバイ』、太字は筆者による。以下同様)

「～なのか?」「～だろう?」など、男性形式の多く使われた上の会話は男性の普通体による会話のステロタイプと言ってもいいだろう。多くの作品において男性は、普通体で行なう会話では、相手によらず男性形式を多用するように描かれてきた³。しかし最近の作品には、選択的に男性形式を使う人物が登場する。例えば(1)で男性形式を多用している20代男性の「スギモト」は、女性の「花」に向かって話す(2)では、男性形式を使用せず中性形式のみを使っている。

(2) ((1)の場面の少し前にかかった夜中の電話)

花 : ごめん、おこしちゃった？

スギモト : いや、起きてたよ。で、どうしたの？ また青治とけんかした？

花 : 今度は、ほんとにダメみたい。

スギモト : そう。

花 : まあ、そんなこと、スギモトに言ってもしょうがないよね。

スギモト : そうだけど、そっちは大丈夫なの？

花 : まあ、いつかはこんな日が来ると覚悟してたし。誰かに話せば気が済むかなと思って。

スギモト : ふーん、なかないんだ。

(石田衣良、前掲作品)

スギモトにあっては、自分のジェンダーに基づいて自動的に男性形式を選択しているのではなく、(1)での話し方は男友達の「青治」に対する同性としての連帯意識を強調し、(2)における中性的な話し方は、相手の女性に寄り添う態度を示している。ジェンダー標示形式を相手への協調のためのストラテジーとして機能させていると見ることができる。

2.2 保護者的態度を示唆する男性形式

ジェンダー標示形式を巧みに使い分ける男性は、マンガ作品にも登場する。(3)と(4)は池谷理香子『ママ』Iからの抜粋である。20代半ばの男性である「タロ」は、スナックの二階の部屋を借りている。(3)は部屋の持ち主で階下のスナックを経営している中年女性「明子」との会話、(4)はタロより少し年下の、明子の娘「郷子」との会話である。郷子は、怪我をした母の代理でスナックのママの仕事をやることになり、タロに手伝ってもらいつつ初日の仕事を終えた直後の会話が(4)である。タロは明子とは親しいが、郷子は母の職場にはあまり寄り付かなかったもので、タロとはこれ以前には殆

ど面識がなかった。

(3) (つまりいて怪我をし入院した明子をタロが見舞う)

タロ：どんくせーな、明子さん。

明子：ったく、やんなっちゃうよ。

タロ：どーすんの、店。それじゃ休むしかないか。

明子：冗談でしょ。治るのに一ヶ月はかかるのに、そんなに長く店閉めたら大変よお。

タロ：んじゃ、雇われママでも探すの？

(中略)

明子：あの子の性格、問題アリだと思わない？

タロ：そおねえ。

明子：すっごく外面いいし、人目を気にしすぎるし、ヘンにプライド高くてすましているし。大体さー、あたしのお金で育ったくせに、どっか見下した態度なのよね。大学入ってから特にむかつくわー。少しはあたしの苦勞、思い知れっていうの。

タロ：結局、そこなのね。

(4) (郷子が母の代わりにスナックのママの仕事をした初日。最後の客が帰った後)

タロ：ま、まだ手際が悪いから大変だろうけど、明子さんなんか一人でやってんだぜ。

郷子：妖怪だわ。

タロ：でも、みんな悪い人じゃねーだろ？ モタモタしてても笑ってくれたしサ。

郷子：まあね。

(池谷理香子『ママ』 I)

(3)でタロは、男性形式(「どんくせえ」)を使う一方、後半、明子の打ち明け

話に対しては、「そおねえ」「そこなのね」など女性的中性形式を用いて自己のジェンダーを消去している。明子の自己開示に接して、明子への協調を示しているのだと考えられる⁴。これに対し(4)では、一貫して自己のジェンダーを標示する形式を使用し、自己の姿を前面に押し出している。自己を堂々と露出し強く自分を印象付けることは、攻撃的意図のもとでは抑圧的に働くかもしれないが、(4)のように親和的意図のもとでは、相手を支えようとする保護者的態度が示唆されよう。また、タロの自己露出はポライトネスの表現でもある。年齢も仕事の経験も郷子より上で二者の間では上位者であるタロは、その場のフォーマリティの度合いの設定について主導的立場にあり⁵、上位者が先に自己露出を行って寛いで見せることは、相手にも同様に寛いだ態度を取るよう促していることになる。即ちタロは、慣れない仕事に疲れ果てている郷子に、頼りになる「兄貴分」の顔を見せ、且つ、「俺の前では気をつかわなくていいよ」というサインを送っているのである。もしタロがここで丁寧体を使用したならば、郷子は寛ぐことができない。かといって彼が、明子に対するのと同様に女性的形式を使用したとすれば、面識の浅い相手には意図的な協調のストラテジーというよりも基本的な個性の表現と受け取られるだろう。(4)での男性形式の使用は、タロの態度とアイデンティティの表示に大きく寄与している。また、タロの基本的な言葉遣いが(4)のようであるからこそ、(3)での明子への言葉遣いが協調のストラテジーとして機能するのだと言えよう。

2.3 攻撃の鎧となる女性形式

最近の作品の中には、強い攻撃的意図が存在する場合に女性の話者が女性のジェンダーが特に顕著に標示される形式を使用する例がしばしば見られる。(5)と(6)を発話した女性にはどちらにおいても怒りの感情があるが、部下への不満を一人になって吐き出すには男性形式を使い、利己的な同輩を面罵するには女性形式を用いている。

- (5) (トイレで一人になって、ミスばかりする部下たちへの不満を吐き出す)

レイ子：大様の耳はロボの耳ーっ！ たわけ、ぼんくら、給料ドロボー！
ここは会社だ、学校じゃねーぞ、バカ教えるヒマはねーんだよ！
やる気ないなら家でねてろー、じゃまだー！

- (6) (部下を都合よく利用して失敗の責任を押し付けようとする男性の同僚を面罵する)

レイ子：おだまり！「触るな、僕の原稿だ」？ で、ミスすりゃ「お前の責任だ」？ まあ、まあ、御都合いいじゃないのオ。成功すりゃおのれの手柄で失敗すりゃ部下のせいってわけ。これまでさんざん責任者ぶって部下を道具扱いしてきたんでしょ。だったら最後まで責任とりなさいよ。ただの道具に非はないわ。確認怠ったあなたのミスよ。

丸ノ内：道具とはイヤミな言い方ですね。僕はただ効率よくいい仕事をしたいだけです。

レイ子：ええ、そうね。合理的で仕事熱心、一匹狼のコンサルタントだと思うわよ。でも覚えておいて。この先二度とあなたにワタシの部下は貸さなくてよ。

(逢坂みえこ「うるわしのお局」『9時から5時半まで』)

(5)のように男性形式を用いて怒りを発散させることもできるレイ子が、卑劣な相手を攻撃する場面では一貫して女性形式を用い、あまつさえ、「おだまり！」「貸さなくてよ」など、抜きん出て女性的な形式をも使用している。怒りの程度がより高く鋭い敵意が存在するのが女性形式の用いられる(6)の方であることが注目される。

次の(7)でも、攻撃的意図のある発話に、話者の通常の話し方からは逸脱とみなされる、女性のジェンダーを強く示す表現が選択されている。年齢も立場も同等の20代前半の女性二人の会話である。

(7) (夏子とこづえは消防学校の訓練生で寮に住む、20代前半の女性)

夏子 : あー、電話? だったら、これ(=携帯電話)使って。

こづえ : (電話を横から取り上げて) こーゆーものは、持ち込み禁止のハズ
よね。教官室に届けさせていただくわ。

(中略)

夏子 : お願い、見逃して……

こづえ : だめ。持ってくわ。規律を守るのは消防吏員として最大の義務。

それがイヤなら、お辞めになれば? 一生懸命やってるこっちと
しては、あんたみたいな人がいると、ムカつくのよね。

(逢坂みえこ「纏一」『火消し屋小町』①)

(7)に見られる、同等の相手に対しても尊敬動詞を使用するなどしてへりくだる女性ジェンダーの強調された話し方は、現在でもかなり年配の女性の間ではしばしば見られるが、(7)の話者「こづえ」においては明らかに有標の選択である。これが最も挑戦的な発話に使われ、「女らしさ」によって口調を和らげるどころか、むしろ敵意を際立たせている。即ち、女性のジェンダーを殊更に強調したことが、単に自分のジェンダーを標示するという以外の動機が存在へと推論を導き、強い攻撃的意図を示唆するのである。過激なジェンダー標示形式の使用がこのような含意を生み出すのは、過剰に丁寧な表現によってあてこすりなどが成立するのと同様に、基本的な指示関係の存在を前提として意図的逸脱を認識させ、基本的な指示対象とは別の内容を示唆するという一般的メカニズムに則っている。

女性形式を攻撃的発話に使用する現象は、マンガや小説だけでなくエッセイにも見られる。斎藤美奈子『物は言いよう』(2004)は、新聞、雑誌、書籍などに表われた女性差別的発言についてのエッセイ集である。「攻撃的で、軽薄なようで、嘲弄を多分に含み、しかし根においてフェミニズムの立場をとる『フリッパントな』文体」(小谷野 2004: 107)を持つと評される斎藤のエッセイは基本的には「である」調である。女性による使用が制限されてき

た男性形式や俗語も縦横に駆使されてはいるものの、それらを使うには、多くは「じゃあいうな、という話である。」「そこまでにしておけ、ってことである。」のように「引用」という枠の中に埋め込まれていて、筆者のコミットメントが直接及ばない構造となっている。しかし時として、筆者の主張をむき出しにするかのように、枠付けなしに話し言葉的な口調が用いられる。男性形式、女性形式を用いた例を見てみよう。

- (8) a. 露出過多の服装を「下着のようだ」「娼婦のようだ」と評するのは自由だが、昔の日本人は本物の下着姿(おばさんのシュミーズ、おっさんのステテコ)で外歩いていたんだぜ。 (斎藤 2004: 111)
- b. だったら書くなっていうの。ここで逃げ腰になったばかりに「予定調和」「お約束」「こずるい手合い」「敵をおびやかさないくらいの批判的態度のオンナぶり」、すべて本人に跳ねかえることになった。批判するならきちんと固有名詞を出す。諸般の事情で出せないなら書かない。一般論としての批判がいちばん「差別的」なのだ。ふんどし、落ちかかってるぜ。 (前掲書: 199)
- (9) a. 社説もこういう雰囲気飲まれたのだと思うが、競技の成果には競技の話で応えるのが選手に対する礼儀。付け加えれば、あとこのズルさね。そんなに「お母さん作り」が好きなら、自分の言葉で言いなさいよ、自分の言葉で。あんたは社説なんだから、人の著作からの引用で責任回避を図るとは、ほんと、スポーツマン・シップにもとる「女の腐ったような」社説だわ。 (前掲書: 70)
- b. 「オンナはずるい」「オンナは得だ」「オンナは楽だ」もの書きのみならず、男にまじって仕事をしていて、この手の言いがかりと一生無縁でいられる女性は少ないのではないか。こういう手合いを理論的に撃破するのは容易ではない。なぜってそれは理論的な攻撃というより、感情的な違和感の表明にすぎないからだ。私にいわせりゃ「ああら、それは嫉妬?」である。ごめんなさいね、得をさせ

ていただいて。いっそ、あなたも女性名前の覆面でお仕事なさった
らいかがかしら。(前掲書:198-9)

(8)(9)においてジェンダー標示表現はあたかも筆者の肉声を響かせるような効果をねらったレトリックとして使われている。男性形式を用いた発話の揶揄するような調子と女性形式を用いた発話の容赦のない切り口上と、どちらが強く攻撃性を感じさせるかについては判断が分かれるかもしれないが、女性形式を用いたものが決して「たおやか」「やさしい」という感じにならず、少なくとも男性形式と同程度の、あるいはそれ以上の敵意を感じさせる。

女性の「やさしさ」や「上品さ」、否定的に捉えれば「弱さ」や「劣位」を象徴すると言われてきた女性形式は攻撃には向かないように思われるのに、このように用いられるのは、攻撃に際して女性形式が一種の防衛として機能するからであろう。この背景には、女性に丁寧で奥ゆかしくあることを求め言語行動や発言の内容について枷をはめてきた社会的伝統がある。荷宮和子『若者はなぜ怒らなくなったのか』は次のように指摘する。

今もなお、良識的な女性たちは、「はしたなさ」や「人間としての品格」といった制約の中で許されたボキャブラリーの範囲内で、戦うことを余儀なくされてしまっている。「ババァ発言」⁶について訴訟を起こした女性たちに対して、ほとんどの男たち、そして少なからぬ女性たちが、「冷笑」に近い反応を見せる理由とは、彼女たちが、「良識」というしほりを受け入れていることの結果として、「フツーの人たち」の共感を得られない文章しか書けない立場に追い込まれてしまっているからである。

(荷宮 2003: 197-8)

荷宮は女性の置かれてきた状況を上のように分析し、良識という枷の中では「フツーの人たち」の共感を得られる発言は行ない難いと主張している。この主張にはもっともな面があるが、しかし現状では、女性が激しい攻撃を行

えば、その原因となった怒りが正当であるかどうかを吟味される前に、「頭に血が上って分別がつかなくなっている」「下品で相手にするに足りないやつだ」と拒絶され否定されてしまう恐れがある。その中で、女性形式を過剰なまでに用いるという選択は、女性に期待されてきた女性像を戯画化しつつ、伝統的規範を遵守できるだけの冷静さを保っていること、また、品位に欠けるわけでもないことを示して、「育ちが悪い」「オンナらしくない」などという、伝統的女性像に感情的に訴えるありがちな反撃を予め封じることができる。「やめねーか!」と男性形式で啖呵を切るのが「槍」を投げて威嚇する行為に喩えられるとしたら、「やめていただけるかしら」と女性形式で皮肉を言うのは「鎧」に身を固めて威嚇することに喩えることができるだろうか。

3. 話者の性と一致しないジェンダー標示形式使用

3.1 女性による男性形式の使用

話者のジェンダーと一致したジェンダーを用いても、話者のアイデンティティとの間に意図的なずれを感じさせることがあり得るが、ジェンダーが一致しない形式の使用は一層明白に意図的逸脱を示すことができ、多彩な効果を生み出す。次の(10)では、通常は中性形式と女性形式を混用する女性の話者「夏子」が、緊張が極度に高まった局面においてくだけた男性形式を使用して、不良少年のような口調で話している。

(10) (夏子は、年長の同級生である山田に、不安症から離婚に至った過去のつらい経験を告白された。)

夏子：ノイローゼやね、早い話。で、離婚……と。でも、なんでわざわざ自分もにつくき消防士に？

山田：別れてからもサイレンの音が耳から離れなかったからよ。この恐怖をなくすには逃げてちゃダメだ、正面から戦わなきゃって。

夏子：それでいきなり消防士かい。やるな、あんたも。

(サイレンの音が聞こえる)

夏子：火事？ 元ダンの地区？

山田：ううん、違う。でもやっぱり現場に出てる消防士たちはいて、やっぱり眠れない夜を過ごしている人たちがいるのよね、どの消防士の周りにも。

夏子：あーあ、あたしは消防士になってよかったー。そーゆーのでウダウダ気イもむ側なんか向いてねーつつうの。なーんにも考えずにがーっと火の中飛び込む側の方が性に合ってるわ、あたしには。

山田：うん、そうね、私もだわ。

夏子：さ、窓閉めて、寝よーぜ。あたしらの消す火はまだまだ先にあんだからさ。

(逢坂みえこ『火消し屋小町』)

山田に辛い過去を思い出させることになってしまった夏子は、重くなった雰囲気をもっと明るい方向に転ずるために滑稽味を出したいのであるが、不真面目ととられかねない応対をすれば相手に失礼であるし、かといってまともなことを普通に言ったのでは雰囲気がますます煮詰まる。この状況において夏子は、飛躍した事柄を述べて滑稽さを出すという選択をしないで、自分の本来の話し方からは逸脱した文体を用い自分のアイデンティティとかけ離れた人格を装うことによって、真面目な受け答えをしつつも緊張を解くという微妙な言語行動を行なっている。異性のジェンダー標示形式の使用が、一種の「冗談」ストラテジーとして機能しているのである。

次の(11)では、女性の話者「なな子」が、異性への好意を示す発言をするのに男性形式を使って自分とは違う人格を装っている。

(11) (研修医のなな子は、辺鄙な町の関連病院に配属されて落胆している。)

荒巻：なな子、俺、やっぱりいいよ。K 中央病院、代わってやるよ。

なな子：へ？ そんな……なんで？ いいのよ、そんな無理しなくて。

荒巻 : いや、ホント、俺、別に場所はどこでもいいんだ。

なな子 : 荒巻！ サンキュー！ 荒巻って、ほんとにいいやつー。

じゃ、この際、そうさせてもらおうかなあ。そういうことなら荒巻の気が変わらないうちに、医局長に！

(なな子はその場を立ち去ろうとするが、振り返る)

なな子 : あ、荒巻、町長の姪とかと結婚すんなよ。

(森本梢子『研修医なな子』58話)

なな子と友人の「荒巻」とは医学部入学以来ずっと一緒に授業を受けてきてあまりにも近い間柄となっているため、今さら異性としての意識を率直に前面に出すことができない。そこでなな子は、異性のジェンダー標示形式を用いて自分とは違う人物のような顔をすることによって照れくさを克服し、「他の誰かと結婚しないで」という意思表示を行なっている。効果という点からは、自己防衛しているために一層、本人の意図とは逆に好意の真摯さが際立っている。

次の(12)も異性に好意の吐露を行なうのに自己防衛手段として異性のジェンダー標示形式が使用されているが、ここではジェンダー標示表現が話者の真意を伝える上で更に決定的な役割を果たしている。

(12)(上司と対立する硬骨漢の課長に密かに好意を寄せるますみは、上司に呼び出された課長が無事に戻ってくるかどうか心配しながら居酒屋で待っている。やっと課長が来る。)

課長 : あれ、ますみくんだけ？ ほかの人たちは？

ますみ : もうとっくに次の店に行っちゃいましたっ。おいっ、トド課長！
心配して待ってたんだぞォー。

課長 : え？

ますみ : 外食4課の八田さんのことで滝沢常務にクビにされちゃうんじゃないかって……。

課長 : なんだ、知ってたのか。

(門橋靖人『怪傑！トド課長』第4話)

(11)も(12)も異性に対する好意の吐露であるが、(11)の内容が直接的であるのに対し、(12)の内容は状況の説明に過ぎない。もしも、ますみの普段の口調で「課長、心配してお待ちしておりました」と発話されていれば、部下としての常識的範囲の配慮を示したものと解釈されるだろう。「待っていた」というあたりさわりのないことを言うために、ますみのアイデンティティとは合わない男性形式を用いて自己防衛をしていることが、部下の立場を超えた一人の女性としての真摯な好意の存在を推測させることになっている。

3.2 男性による女性形式の使用

女性が男性形式をストラテジーとして用いることに比べて、男性が女性形式を使用することには抵抗が強いようで、使用例が少ない。2節で見た(2)のスギモトも(3)のタロも、女性への同調を示しているが、女性形式は用いていない。タロには、男性形式の使用回避だけでなく、今でも人によっては男性が使うことに違和感があるしれない女性的中性形式「そうねえ」「そこなのね」を用いるという、一歩踏み込んだ選択が見られる。これが、タロの基本的アイデンティティのイメージに影響することなく協調のストラテジーとして機能するのは、上位者である明子からの、娘との親子関係の問題を打ち明けるという自己開示が先にあり、それへの対応としての選択だからである。ストラテジーとしての解釈が成立するには文脈の中にその使用を動機付ける要因がなければならず、それが欠けていれば、話者のアイデンティティについて特定のメッセージを与えることになるだろう。

次の(13)では、男性の話者によって女性形式が、しかも、性によって使用がはっきり分かれているとされている自称代名詞⁷のそれが使用されている点が注目される。

(13)(晶彦は、クラブで楽しんでいるところを女友達の実果に見られてしまった)

実果：生霊とかね。

晶彦：やめてよ、俺、そういうの、本当こわい。実果ちゃん、クラブとか嫌いって言ってたじゃん。

実果：うん。

晶彦：なんで一人で来るの。俺と来ればいいじゃない。

実果：だってあたしとこない時の晶彦が見たかったんだもん。

晶彦：うはは、へんなのー、で、どうだった？ ワタシ。

実果：モテてた。

(池谷理香子『さよならスモーキーブルー』)

普通には「俺」という自称詞を使っている「晶彦」は、気づかないうちに見られてしまった自分の姿への評価をガールフレンドに訊ねる質問では「ワタシ」を用いている。女性が男性形式を用いた(11)や(12)の場合と同様に、本当の自分ではない人物の顔を装うことによって距離を取り、逃げ道を用意しているのである。この場合も、当惑をごまかしたいという、ストラテジーを使用する動機が存在するからこそ、「ワタシ」の使用が、晶彦が女性的言葉づかいをするタイプの男性であるということを意味するのではなく、アイデンティティの意図的偽装というストラテジーとして理解される。

3.3 「他人格モード」

話者は、伝達したい内容を率直に表現するだけでなく、何らかの意図的逸脱を行なって推論を誘発し、認知的意味とともに様々の非認知的意味を伝達しようとすることがある。話者がわざと自分のアイデンティティが指定するものではない文体的形式を用いて一時的に自分でない誰かのふりをするこ、即ち、意図的で明示的なアイデンティティの偽装を、因(2004)では「他人格モード」と呼んで、内容の飛躍によって逸脱を示唆する操作と区別し

た。額面通りには受け取り難い突飛なことを言うのも、「他人格モード」のように言い方を逸脱させるのも、どちらも発話に対する完全なコミットメントを保留して緩衝作用を生じさせること、即ち、「本気じゃない」と言って逃げる余地を確保する点は同じである。ただ、「他人格モード」でなされる発話の内容は、飛躍や誇張を含まない話者の本音そのままであり得る。もちろん、「他人格モード」であることを示すには、飛躍した内容をレトリックとして述べるときと同様に、通常はイントネーションの操作も必要である。率直な内容でも大げさなイントネーションや声色を使えば冗談として通用させることは可能で、事実、そうしたことはどの言語にも見られる現象であろう。しかし日本語の場合は、普通体・丁寧体のレベル、ジェンダー標示形式、自称詞・終助詞・感嘆詞等、話者の立場や性などの特性によって無標で利用できる範囲が指定されている様々な形式が存在しており、これらの形式を操作することで逸脱を明確化することができる。こうした形式を持たない言語では、意図的逸脱を表示するには「内容」と「音声」が主要な手段となるのに対し、日本語では意図的逸脱を示す装置が豊かであるといえることができるだろう。「文体的形式によるずらし」というカテゴリーを区別して認識することは、日本語の特徴をより明確にする上で、また、こうした文体的形式を持たない母語を持つ人々への日本語教育という面からも、意味のあることである⁸と考える。

4. 終わりに

本稿では、ジェンダー標示形式が話者のジェンダーによって自動的に選択され使用されるのではなく、意図的に選択されて、話者の態度を示したり特定の発話に重層的な意味を与えたりなど、いろいろな効果をあげていることを観察した。また、必ずしも話者のジェンダーと一致した使用例ばかりではないことも示した。本稿で取り上げた例はフィクションの作品から取ったものが多いが、これらは決して日常の言語使用とかけ離れたところに成立しているのではなく、日常言語の可能性の範囲内で、会話の一般的な原則に則っ

て機能している。ジェンダー標示形式の存在は、言語使用に対する制約の一つではあるが、表現を多彩にする装置でもあり得る。

改めて指摘するまでもないが、ある要素が談話の中で意味するものは、話者が基本的に親和的意図を持っているか攻撃的意図を持っているかによって大きく違ってくる。例えば、相手に対して自分の強さを誇示することは、攻撃的意図の存在を前提すれば抑圧や支配への意図を感じさせるが、親和的意図を前提すれば、責任を引き受けようとする意志や相手を庇い護ろうとする意図の表明でもあり得る。形式的丁寧度の高さが相手への折り目正しい態度や上品な人柄を表すばかりではなく、相手との間に一線を画そうとする意志や権高な人柄を示唆することがあることは、「慇懃無礼」という言葉の存在が示すように、よく知られている。逆に、ぞんざいで乱暴な言葉も、文脈や評価者が変われば、ざつくばらんで気さくな態度の表れと解釈され得る。ジェンダー標示表現の使用も、その意味するところは決して一様ではない。例えば女性がいわゆる「女言葉」を使うことも、必ずしも伝統的な女性像への順応を示しているとは限らず、むしろ「過激なオンナ言葉」は、強く攻撃的な姿勢のラベルとなっていく可能性すらある⁹。また、女性が男性形式を用いることも、決して「伝統的な女性像の拒否」「自己主張の象徴」ではなく、華奢な若い女性が話す「男の子ことば」などが一つの媚態として機能している例もある¹⁰。ジェンダー標示表現の使用については、数量的観点からだけではなく、質的な面の分析も行なって、その表現手段としての可能性の広がりにも目を向けていく必要がある。

注

- 1 会話者がグライスの「協調の原理」(Grice 1975: 67)を守っていると前提した場合には、協調の原則を構成する公理への明白な違反があれば、発言を状況に合うように再解釈する推論の連鎖を生む。話者のアイデンティティについて規範とは異なる指標を用いるのは、様態の公理への違反と考えられる。
- 2 女性形式を例にとれば、「て形終止の疑問文(例：お聞きになって?)」「て形

終止+よ(例：私がお送りしてよ)」「(同等または目下の相手に対する)尊敬動詞の普通体疑問文(例：いらっしゃる？ お聞きになる?)」「お+連用形による命令文(例：お待ち)」などは、現代では普通の若い女性が使えば違和感を与えるだろう。

- 3 2004年に発表された作品でも、男性同士は例えば次のように会話する。

「いらねえよ。そんなやつつけ仕事で金取ったら、親方が枕元に立っちゃう。材料費もそっちもちだ。好きに処分してくれ」
 「しかし、それじゃ俺の気がすまん。何か望みがあれば言ってくれ」
 「じゃあ、あれがいい。当たり年のバローロだ。ずっと気になってたんだ」
 「ほう、目ざといな」

(大河原通『王様の仕立て屋』)

- 4 話者が相手への親しみを示すのに使用されるストラテジーの種類と頻度は会話参加者の関係に大きく左右される。また、下位者は上位者が設定する基調に従うのがポライトネスの表現になる(松村・因 2001: 37-39)。従って、上位者の自己開示に対しては、下位者も接近を示すことが、一般的には望ましい。類例は因 2004aを参照。
- 5 上に述べたように、下位者の側からは改まり／寛ぎの程度は決定できない。上位者が改まった調子を保っていれば下位者もそれを保つ。一方、上位者がくだけた調子へ移行した場合には下位者が改まった調子を保つことも可能だが、相手の主導に従わないことで慇懃無礼な感じや相手に対して不信感をもっているような印象を与える恐れがあり、一定の枠の中で親しみのストラテジーを用いて寛いだ調子を見せるほうがポライトである(松村・因 2001の資料を参照)。
- 6 石原慎太郎東京都知事による「文明がもたらした最も有害なものはババア」という発言。
- 7 小林 1999: 135、金丸 1997: 15 参照。
- 8 ジェンダー標示形式や文体レベルの逸脱による含意は、上級者であっても外国人学習者には非常に理解しにくく、深刻な誤解につながりかねない(因 2004b、2005a 参照)。
- 9 「典型的なオンナ言葉」が強気な態度の発言で出現する例が若い作家の作品を中心にしばしば見られる(九州大学比較社会文化学府博士課程、山路奈保子氏

の観察に基づく)。

- 10 若い華奢な女性が「何でもいいはだめだよ」(醤油のコマーシャル)と言う例について、「可愛さという女性性と男性的自己主張とを混在させている」という解釈が提出されたことがあったが(2004年9月、ヘルシンキで開催された International Conference of Language, Politeness and Gender: the pragmatic roots における Matsumoto Yoshiko 氏の講演)、この「だよ」は、男性的強さを象徴しているというよりは、男の子のような言葉遣いをしてしまう性の未分化な少女を演じるという媚態であろう。成人女性が未発達な少女を演ずる(この場合は、ずれを明示する方向ではなく、自己のアイデンティティの表出として通用させようとしている)のが媚態であり得るのは、日本の現代の世相の独特な事情かもしれない。本稿では自己のアイデンティティとのずれを明示しない姿勢で用いられる異性形式の事例については扱わなかったが、こうした例についても分析が必要である。

参考文献

- 井出祥子 1997 「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて」井出祥子(編)『女性語の世界』明治書院 pp.1-14.
- 内田伸子 1997 「会話行動にみられる性差」『女性語の世界』明治書院 pp.74-93.
- 尾崎義光 1997 「女性専用の文末形式の今」現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』ひつじ書房 pp.58-92.
- 金丸芙美 1997 「人称代名詞・呼称」『女性語の世界』明治書院 pp.15-32.
- 小林美恵子 1997 「自称・他称は中性化するか?」『女性語の世界』明治書院 pp.113-37.
- 小谷野敦 2004 『すばらしき愚民社会』新潮社
- 寿岳章子 1979 『日本語と女』岩波書店
- 高崎みどり 1996 「テレビと女性語」『日本語学』, 9, 46-56.
- 因京子 2003 「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』, 3, 17-36. 日本語ジェンダー学会
- 2004a 「ジェンダー表現の機能」河上誓作教授退官記念論文集刊行会(編)『言葉のからくり—河上誓作教授退官記念論文集』英宝社 pp.773-785.
- 2004b 「マンガ読解に見る韓国人学習者の日本語理解」『韓日言語文化

- 研究』, 5, 63-88.
- 2005a 「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点—日本語学習者によるマンガ理解を通して」『比較社会文化』, 11, 83-92.
- 2005b 「女性語のゆくえ—絆として鎧としての女性語の可能性」『言語文化叢書』, 15, 30-45. 九州大学大学院言語文化研究院
- 中島悦子 1997 「疑問表現の様相」現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』ひつじ書房 pp.58-92.
- 荷宮和子 2003 『若者はなぜ怒らなくなったのか』中央公論新社
- 松村瑞子・因京子 2001 『日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』平成 10-12 年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))研究成果報告書
- 水本光美 2005 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター」『日本語とジェンダー』, 5, 日本語ジェンダー学会
- メイナード、泉子 K. 2001 『恋するふたりの感情ことば—ドラマ表現の分析と日本語論』くろしお出版
- Grice, P. 1975 “Logic and conversation.” *Syntax and Semantics*, 3, eds. by P. Cole & Morgan. pp.41-58. New York: Academic Press.
- Gumperz, John J. 1982 *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press
- Lakoff, Robin 1975 “Language and Women’s Place.” *Language in Society*, 2, 45-80.
- Leech, Geoffrey N. 1983 *Principles of Pragmatics*. London: Longman

例文の出典

- 石田衣良 2002 「泣かない」『スローグッドバイ』集英社
- 池谷理香子 1998 『ママ』集英社
- 1999 『さよならスモーキーブルー』集英社
- 大河原遼 2004 『王様の仕立て屋』集英社
- 逢坂みえこ 1989 「うるわしのお局」『9時から五時半まで』② 集英社
- 1999 『火消し屋小町』① 小学館
- 斎藤美奈子 2004 『物は言いよう』平凡社
- 森本梢子 1997 『研修医なな子』集英社